

研究報告

看護系大学生の抱く看護師理想イメージおよび 看護系大学生自身の自己イメージの構造

The structure of ideal images of nurses and self-images among nursing students.

古川秀敏¹⁾, 小出水寿英²⁾, 山口恭平³⁾, 西垣里志⁴⁾, 門脇千恵⁴⁾

1) 関西看護医療大学 看護学部 地域・在宅看護学領域

2) 関西看護医療大学 看護学部 精神看護学領域

3) 関西看護医療大学 看護学部 成人・老年看護学領域

4) 前 関西看護医療大学 看護学部

Hidetoshi Furukawa¹⁾, Toshihide Koizumi²⁾, Kyohei Yamaguchi³⁾,
Satoshi Nishigaki⁴⁾, Chie Kadowaki⁴⁾

1) Kansai University of Nursing and Health Sciences, Faculty of Nursing, Community Health and Home Healthcare Nursing

2) Kansai University of Nursing and Health Sciences, Faculty of Nursing, Psychological Nursing

3) Kansai University of Nursing and Health Sciences, Faculty of Nursing, Adult and Gerontological Nursing

4) Kansai University of Nursing and Health Sciences, Faculty of Nursing, (previous job)

要約

看護系大学生 289 名に対し、看護師に対する理想イメージおよび看護系大学生自身の自己イメージに対する回答を求め、その因子構造を検討した。その結果、看護師に対する理想イメージとして、『看護師の資質を表す理想イメージ』『看護師の冷静さと権威を表す理想イメージ』『看護師の清らかさを表す理想イメージ』『看護師の女性らしさを表すイメージ』の 4 因子が抽出された。一方、自己イメージでは、『理想の看護師の資質と合致する自己イメージ』『自身のポジティブさを表すイメージ』『自身のネガティブさを表すイメージ』の 3 因子が抽出された。看護師の理想イメージにあった『看護師の女性らしさを表すイメージ』を自己イメージにみとめなかった理由として、本調査における男性研究協力者が高い割合であったこと、病院だけでなく看護大学といった看護界における男子学生や男性教員の存在の浸透により、女性性を表す看護師の理想像はありながらも、看護という職がもはや女性だけのものではないという現実的なイメージの影響がうかがわれた。

キーワード：看護系大学生，理想イメージ，自己イメージ，因子構造

Keywords：Nursing students, Ideal images, Self-images, Factor structure

I. はじめに

近年の少子化の問題は高等教育の場にも影響を及ぼし、大学全入時代とよばれる状況を招くに至った。そのような中、わが国における看護系大学は200校を超え、わが国の看護教育及び看護の発展において高度な教育と研究の中核を担う存在となっている。したがって、看護系大学には、卒業生の質保証と教育力の向上が一層求められるといえよう。

バブル経済の終焉以降、わが国の経済的状況は悪化をたどり、失われた20年ともいわれる。特にリーマンショック以降においては、わが国のみならず世界的な経済悪化の状況となっている。近年においては、グローバル化の名のもと成果主義が蔓延し、大学卒業者の就職難はもとより、わが国に伝統的であった終身雇用制という就業体制も変化してきている。そのような状況の中、資格取得は就職時に有利とされ、大学全入時代とは言われるものの、特に、看護系大学の志願者数は増加している(河合塾, 2015)。その志願者の中には、看護師になりたいという本人の意思よりは、両親や知人の勧めにより志願する学生も少なくないと思われる。そのような学生においては、時として学習意欲が高いとはいえない状況を生じさせる可能性が推測される。このような学生を迎えなくてはならない状況においては、学生の学習意欲を高め、質の高い卒業生を送り出すことが重要と思われる。

医療技術の進歩により、看護師には患者の様々なニーズに対するきめ細やかなケアが求められている。しかしながら、理論や知識に基づく知力の育成を重視する看護基礎教育と臨床現場が求める実践能力とのギャップにより、新人看護師のリアリティショックが問題となっている(内山, 2005)。人の行動は、必ずしも具体的・実証的知識に基づくものではなく、漠然とした印象に左右されることは少なくない(吾郷, 1996)。すなわち、看護学生が抱く看護師へのイメージが、就職した後の看護に対する姿勢に関係することが推測される。

看護師に対するイメージに関する調査において、臼井ら(1999)は、171名の看護職者を対象に現役看護師自身が描く看護師の理想像について、「観察力を要す」「正確な」「責任感のある」「専門的」「技術の熟達」「健康的な」など25項目に

おいて、高い評定があったことを報告している。さらに、門脇ら(2001)は、268名の看護系大学生が抱く看護師の理想像について「コミュニケーションが上手」「信頼できる」「やりがいのある」「責任感のある」「テキパキ」「親しみやすい」「専門的」「将来性がある」など23項目が高い評定であったことを報告している。また、看護師のイメージに関する研究では、イメージの因子構造を探る試みもなされている。佐々木ら(1999)は、看護師が理想とする像について因子分析を行い、「肯定的専門イメージ」「学究的イメージ」「否定的専門イメージ」「女性イメージ」「外見上看護師イメージ」の5因子を抽出している。岡本ら(2006)は、看護職イメージの形成について、75名を対象に看護学生の入学時から全臨地実習終了までの3年間の看護職イメージを調査し、入学時には「奉仕の心とあこがれ」「人間関係の困難」「いろいろな働きかけをする・医師とは違う仕事」、2年次では「対人関係の困難・苦労・知識・忍耐」「あこがれ・一生の仕事」「医師などと協働、医師とは違う仕事」、全臨地実習終了時では、「専門的知識・技術の提供」「医師の手伝いや命令(指示)にしたがう仕事とは思わない」「地味で仕事内容に比べ経済的に恵まれない」とイメージしていることを報告している。

このように看護師のイメージについてはいくつかの知見が得られている。しかしながら、これまでの看護師に関するイメージ調査は、1990年代中ごろから2000年代前半に集中しており、近年の医療事情を反映したイメージとは異なるのではないかと考えた。さらに、看護師に対する理想イメージと現実像のイメージの調査されているものの(臼井ら, 1999; 門脇ら, 2001; 佐々木ら, 1999)、同一の尺度を使用した看護系大学生自身の自己イメージに関する研究は決して多くない。佐々木ら(1999)が、看護師の現実像は理想イメージと異なることを指摘するように、看護師になろうとする学生自身の自己イメージも将来の姿である「理想の看護師」のイメージと異なることが予測される。そこで、本研究では、看護系大学生の抱く看護師に対する理想イメージおよび看護系大学生自身の自己イメージの構造の違いを明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 研究デザイン

量的記述的研究デザイン。

2. 測定尺度

看護師に対する理想イメージおよび看護系大学生自身の自己イメージについては、白井ら (1999) が作成した 64 項目の質問票から「白衣」「キャップ」などといった外見イメージ等を除いた 58 項目を用いた。これらは「誠実な」「やさしい」といった形容詞的な表現によって代表されるイメージによって構成されている。各項目に対して「弱い」から「強い」までの 4 段階で評価してもらい、各評価に対して 1 から 4 点の点数を与え、点数が高いほど質問項目に代表されるイメージが高くなるよう点数化した。

そのほかの項目として、年齢、性別のほか、志願理由、希望進路など学習意欲に関する項目を収集した。

3. データ収集および分析方法

1) データ収集の方法

A 大学の看護学生 (以下、研究協力者とする) に、同大学の講義室に集合していただいた。研究協力者に、研究の目的及び概要を、文書を用いて口頭で説明した。講義室内で質問票への回答を依頼した。なお、質問票への回答および回収をもって研究参加への同意とした。

2) データ分析方法

研究協力者の概要には記述統計を使用した。看護師に対する理想イメージ、看護学生自身の自己イメージに関しては、最尤法、バリマックス回転による因子分析を行い、その構造を検討した。

統計解析には統計パッケージソフト SPSS statistics ver.22 を用いた。

3) 倫理的配慮

研究協力者には研究の目的と具体的な方法を、説明文書を用いながら、口頭で説明を行った。具体的には、1) 個人情報保護法に則り、知り得た情報の管理を行うこと、2) プライバシーの保護に十分気を遣い、研究協力者の施設での個人が特

定しない形式に変換し、記号化すること、3) 収集されたデータは、外付けのハードディスクにのみバックアップデータを保存し、作業が終わるたびに研究代表者の研究室内の鍵のかかる書棚に保存することで外部への流出を防ぐ対応をとること、4) 研究終了と同時に質問票はすべてシュレッダーにかけるとともに、入力データおよび解析結果はハードディスクから完全に削除することなどを説明した。あわせて、参加は自由意志であること、参加協力をしなくても不利益を被らないこと、質問紙の提出をもって研究参加に同意となることも説明した。

III. 結果

1. 研究協力者の概要

表 1 に研究協力者の概要を示した。本調査の研究協力者数は 289 名であり、その内訳は 1 年生が 77 名 (26.6%)、2 年生が 84 名 (29.1%)、3 年生が 79 名 (27.3%)、4 年生が 48 名 (16.6%)、無回答 1 名であった (表 1)。男性が 69 名 (23.9%)、女性が 213 名 (73.7%)、無回答 7 名であった。

A 大学看護学部を志望した理由は、「希望する学部であった」が 175 名 (60.6%)、「4 年制大学だから」が 124 名 (42.9%)、「資格が取れば就職に困らないから」が 118 名 (40.8%)、「希望する大学に行けなかったから」が 112 名 (38.8%)、「医療関係の分野に興味がある」が 95 名 (32.9%)、「進路相談の先生に勧められたから」が 46 名 (15.9%)、「家族や知人に勧められたから」および「家が近かったから」が 43 名 (14.9%) などであった。

卒業後の進路では、看護師として働きたいとしたものは 271 名 (93.8%)、保健師が 47 名 (16.3%)、助産師が 23 名 (8.0%)、養護教諭が 30 名 (10.4%)、大学院進学が 34 名 (11.8%) であった。一方、看護とは別の分野で働きたいとしたものは 12 名 (4.2%) であった。

家族に医療関係者がいるとしたものは 119 名 (41.2%) であった。また、自身に入院経験を有するものが 115 名 (39.8%)、家族に入院経験があるものが 246 名 (85.1%) であった。

表 1 研究対象者の概要

		(n=289)	
項目	人	(%)	
学年			
1年生	77	(26.6)	
2年生	84	(29.1)	
3年生	79	(27.3)	
4年生	48	(16.6)	
性別			
男性	69	(23.9)	
女性	213	(73.7)	
無回答	7	(2.4)	
志望の理由 (重複回答)			
希望する学部であった	175	(60.6)	
4年制大学だから	124	(42.9)	
資格が取れば就職に困らないから	118	(40.8)	
希望する大学に行けなかったから	112	(38.8)	
医療関係の分野に興味がある	95	(32.9)	
進路相談の先生に勧められたから	46	(15.9)	
家族や知人に勧められたから	43	(14.9)	
家が近かったから	43	(14.9)	
卒後の進路 (重複回答)			
看護師として働きたい	271	(93.8)	
保健師として働きたい	47	(16.3)	
助産師として働きたい	23	(8.0)	
養護教諭	30	(10.4)	
大学院進学	34	(11.8)	
看護とは別の分野で働きたい	12	(4.2)	
家族における医療関係者の有無			
いる	119	(41.2)	
いない	170	(58.8)	
入院の経験の有無			
あり	115	(39.8)	
なし	174	(60.2)	
家族における入院の経験の有無			
あり	246	(85.1)	
なし	43	(14.9)	

2. 看護師の理想イメージの因子構造

研究協力者の理想とする看護師イメージの因子構造を明らかにするため、最尤法による因子分析を行った。その結果、Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度は .88 であった。合計 15 因子が抽出されたが、スクリープロットを確認し、4 因子構造と判断した。この 4 因子による累積寄与率は 31.4% であった。表 2 にバリマックス回転後の因子行列を示す。

第 1 因子は「技術の熟達」「専門的」「観察力を要す」「テキパキ」「コミュニケーションが上手」「応用力がある」「自立」「信頼できる」「将来性のある」「やりがいのある」「勤勉な」「責任感のある」「価値のある」「知的な」「体力が必要な」「管理的」「協調性のある」「経済的観念のある」「健康的な」の 19 項目から構成された。第 2 因子は「威圧的」「恐ろしい」「冷たい」「陰険な」「きびしい」「プライドが高い」の 6 項目から構成された。第 3 因子は「やさしい」「清楚な」「清潔な」「誠実な」「あたたかい」の 5 項目から構成された。第 4 因子は「美人」「かわいい」「育ちの良い」「女らしい」より構成された。

各因子の Cronbach の α 係数は、第 1 因子で .91、第 2 因子で .85、第 3 因子で .82、第 4 因子で .69 であった。

表 2 看護学生の看護師イメージの構造

	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子
技術の熟達	0.76	0.01	-0.05	0.01
専門的	0.70	-0.06	0.08	0.01
観察力を要す	0.70	-0.01	0.05	-0.02
テキパキ	0.69	0.05	0.12	0.02
コミュニケーションが上手	0.67	-0.13	0.17	0.08
応用力がある	0.65	-0.02	0.14	-0.03
自立	0.62	0.13	0.06	-0.01
信頼できる	0.56	-0.21	0.26	0.12
将来性のある	0.55	0.05	0.01	0.18
やりがいのある	0.54	-0.07	0.21	0.06
勤勉な	0.53	0.04	0.17	-0.04
責任感のある	0.51	-0.08	0.23	-0.09
価値のある	0.51	0.01	0.19	0.02
知的な	0.50	-0.01	0.09	0.14
体力が必要な	0.50	0.14	0.09	-0.07
管理的	0.49	0.10	0.05	-0.02
協調性のある	0.48	-0.10	0.20	-0.03
経済的観念のある	0.42	0.19	-0.05	0.10
健康的な	0.41	-0.13	0.22	0.17
威圧的	0.01	0.79	-0.11	0.03
恐ろしい	-0.16	0.76	-0.10	0.07
冷たい	-0.02	0.73	-0.28	-0.02
陰険な	-0.01	0.63	-0.18	0.08
きびしい	0.21	0.56	-0.03	-0.10
プライドが高い	0.18	0.54	-0.14	-0.02
やさしい	0.16	-0.35	0.64	0.17
清楚な	0.26	-0.13	0.57	0.35
清潔な	0.41	-0.16	0.56	0.15
誠実な	0.22	-0.30	0.56	0.10
あたたかい	0.27	-0.34	0.47	0.14
美人	0.13	0.00	0.12	0.77
かわいい	-0.09	-0.09	0.12	0.71
育ちの良い	0.06	0.10	0.14	0.56
女らしい	-0.02	0.13	0.03	0.41
寄与率 (%)	15.3	7.4	4.6	4.0
累積寄与率 (%)	15.3	22.7	27.4	31.4

最尤法、バリマックス回転

3. 自己イメージの因子構造

自己イメージの因子構造を明らかにするため、因子分析を行った。看護師イメージの時と同様に最尤法による因子分析を行った。その際の Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度は .93 であった。合計 15 因子が抽出されたが、スクリープロットを確認し、3 因子構造と判断した。この 3 因子による累積寄与率は 31.3% であった。表 3 にバリマックス回転後の因子行列を示す。

第 1 因子は、「応用力がある」「専門的」「技術の熟達」「テキパキ」「勤勉な」「コミュニケーションが上手」「知的な」「科学的」「自立」「責任感のある」「理性的」「信頼できる」「たくましい」「安定した」「価値のある」「観察力を要す」の 16 項目より構成された。第 2 因子は、「明るい」「親しみやすい」「活発な」「楽しい」「あたたかい」「協調性のある」「さわやか」「将来性のある」「健康的な」「個性的」の 10 項目より構成された。第 3 因子は、「恐ろしい」「威圧的」「気が強い」「プライドが高い」「陰険な」「きびしい」「冷たい」の 7 項目から構成された。

各因子の Cronbach の α 係数は、第 1 因子で .94、第 2 因子で .88、第 3 因子で .81 であった。

表3 看護学生の自己イメージの構造

	第1因子	第2因子	第3因子
応用力がある	0.8	0.2	0.1
専門的	0.7	0.2	0.2
技術の熟達	0.7	0.2	0.2
テキパキ	0.7	0.3	0.3
勤勉な	0.6	0.1	0.1
コミュニケーションが上手	0.6	0.5	0.1
知的な	0.6	0.1	0.2
科学的	0.6	0.0	0.2
自立	0.6	0.2	0.2
責任感のある	0.5	0.3	0.2
理性的	0.5	0.1	0.0
信頼できる	0.5	0.4	0.1
たくましい	0.5	0.3	0.2
安定した	0.5	0.3	0.1
価値のある	0.5	0.3	0.2
観察力を要す	0.4	0.2	0.2
明るい	0.2	0.8	0.1
親しみやすい	0.3	0.7	-0.1
活発な	0.3	0.7	0.2
楽しい	0.1	0.7	0.0
あたたかい	0.3	0.6	0.0
協調性のある	0.3	0.5	0.0
さわやか	0.3	0.5	0.1
将来性のある	0.4	0.4	0.1
健康的な	0.0	0.4	0.0
個性的	0.0	0.4	0.1
恐ろしい	0.1	0.0	0.7
威圧的	0.2	0.0	0.7
気が強い	0.2	0.3	0.6
プライドが高い	0.1	0.1	0.5
陰険な	0.1	-0.2	0.5
きびしい	0.3	0.1	0.5
冷たい	0.0	-0.2	0.5
寄与率(%)	14.9	9.6	6.7
累積寄与率(%)	14.9	24.6	31.3

最尤法、バリマックス回転

IV. 考察

1. 看護師の理想イメージの因子構造

因子分析の結果、看護師の理想イメージは4因子構造であることがうかがわれた(表2)。第1因子は「技術の熟達」「専門的」「観察力を要す」「テキパキ」「コミュニケーションが上手」「応用力がある」「自立」「信頼できる」「将来性のある」「やりがいのある」「勤勉な」「責任感のある」「価値のある」「知的な」「体力が必要な」「管理的」「協調性のある」「経済的観念のある」「健康的な」の19項目から構成された。これらは、「技術の熟達」「観察力を要す」「コミュニケーションが上手」「応用力がある」「信頼できる」「将来性のある」「やりがいのある」「勤勉な」「責任感のある」「知的な」「体力が必要な」「管理的」「協調性のある」「経済的観念のある」「健康的な」など看護師の資質を表すものと解釈される。そこで、第1因子を『看護師の資質を表す理想イメージ』とした。

門脇ら(2001)は、看護師の理想像について、「コミュニケーションが上手」「信頼できる」「やりがいのある」「責任感のある」「テキパキ」「専門的」「観察力を要す」「健康的な」「自立」などの項目において、高い評価がなされていたことを明らか

にしている。また、江口ら(2006)は、看護学生の抱く看護師イメージについて、専門職熟練型イメージを報告している。このイメージには、「価値のある」「責任感のある」「専門的」「勤勉な」「知的な」など、本研究においても抽出された項目が含まれていた。すなわち、看護学生が看護師に対して抱く資質や専門性を示すイメージは理想とする看護師のイメージに関連することがうかがわれる。

第2因子は「威圧的」「恐ろしい」「冷たい」「陰険な」「きびしい」「プライドが高い」の6項目から構成された。これらは、冷静さと権威を表すイメージと解釈される。そこで、第2因子を『看護師の冷静さと権威を表す理想イメージ』とした。門脇ら(2001)は、「威圧的」「恐ろしい」「冷たい」「陰険な」などのイメージは理想イメージとしては低い評価であったことを報告している。また、江口ら(2006)が抽出した看護師イメージについても、これらの項目はみられなかった。さらに、小山田ら(1994)の調査においても否定的な看護師イメージは高校生よりも看護学生のほうが低い結果が報告されている。一方、佐々木(1999)は、看護師自身が抱く理想イメージにおいて、「危険のある」「恐ろしい」「威圧的」「忙しい」「汚い」「陰険な」「低賃金の」からなる否定的専門イメージを抽出している。本研究の結果は、佐々木ら(1999)の否定的な専門イメージを支持するものと考えられる。

第3因子は「やさしい」「清楚な」「清潔な」「誠実な」「あたたかい」の5項目から構成された。これらは清潔さや誠実など、外観だけでなく精神的な清らかさを表していると解釈される。そこで第3因子を『看護師の清らかさを表す理想イメージ』とした。門脇ら(2001)は、「やさしい」「清潔な」「誠実な」「あたたかい」の項目は看護師への理想イメージとして評価が高かったことを報告している。吾郷(1996)は、看護師のイメージとして、「あたたかい」「明るい」「正直な」などの性格的特性の因子を明らかにしている。くわえて、江口ら(2006)は「優しい」「清潔な」「あたたかい」を含む安らぎ型イメージを抽出している。これらの結果は、看護師に対する外観だけでなく性格的なイメージが理想像に影響しているものと推測される。

第4因子は「美人」「かわいい」「育ちの良い」「女らしい」より構成された。この結果は看護師の女性らしさを表すものと解釈される。そこで、第4因子を『看護師の女性らしさを表すイメージ』とした。この因子は看護師の理想イメージを調査した佐々木ら（1999）の結果と同様であった。平成25年の就業看護師数は1,571,647名であり、うち男性看護師は63,321名である（日本看護協会, 2015）。白鳥（2009）が、看護は女性専用の職種という受け止めかたが依然として残っていたと報告しているように、男性看護師数の増加がいわれているものの、圧倒的に女性の多い職種であり、まだまだ看護職は女性の仕事とするイメージが残存しているものといえる。これらによって、看護師の理想イメージとしても女性性が抽出されたものと推測する。

本研究において抽出された4因子のうち『看護師の資質を表す理想イメージ』および『看護師の清らかさを表す理想イメージ』は、質問項目が異なる先行研究においても同様であった。しかしながら、本研究において『看護師の冷静さと権威を表す理想イメージ』『看護師の女性らしさを表すイメージ』は、看護師を対象とした佐々木ら（1999）の先行研究結果とのみ合致するものであった。

2. 自己イメージの因子構造

因子分析の結果、A大学看護学部生の自己イメージは3因子構造であることが示唆された。第1因子は、「応用力がある」「専門的」「技術の熟達」「テキパキ」「勤勉な」「コミュニケーションが上手」「知的な」「科学的」「自立」「責任感のある」「理性的」「信頼できる」「たくましい」「安定した」「価値のある」「観察力を要す」の16項目より構成された。これらのうち、11項目は看護師の理想イメージに存在する項目と合致していた。そこで、『理想の看護師の資質と合致する自己イメージ』とした。この自己イメージが理想イメージの第1因子『看護師の資質を表す理想イメージ』とおよそ合致していたのは特徴的と思われる。看護教育を受ける中で、看護師としての資質を問われる自己イメージが形成されたものと推測する。

第2因子は、「明るい」「親しみやすい」「活発な」「楽しい」「あたたかい」「協調性のある」「さわや

か」「将来性のある」「健康的な」「個性的」の10項目より構成された。これらはすべて、ポジティブなイメージを表す項目である。そこで、第2因子は『自身のポジティブさを表すイメージ』とした。一方、第3因子は、「恐ろしい」「威圧的」「気が強い」「プライドが高い」「陰険な」「きびしい」「冷たい」の7項目から構成された。これらはすべて、自己のネガティブなイメージを表す項目である。そこで第3因子を『自身のネガティブさを表すイメージ』とした。この両因子はポジティブとネガティブの両極を表すものであり、研究協力者が自己を客観的に評価していることを示唆する。看護は患者との相互関係のなかで実践される。したがって、そのやり取りの中で自身の態度が患者にとって有益だったかどうか問われることとなる。さらに、研究対象者の中には、すでに臨床実習を経験している者もあり、日々の実習の中での実践を振り返りの経験を通し、自己の特性を客観視していることも推測される。

今回、抽出された3因子は、理想イメージと類似するものであった。しかしながら、自己イメージには、理想イメージにみられた女性性を表す『看護師の女性らしさを表すイメージ』は認めなかった。このことは、本研究において特徴的な結果であった。前述のとおり、平成25年の就業看護師数は1,571,647名であり、うち男性看護師は63,321名で4.03%とされている（日本看護協会, 2015）。また、2013年度の全国の看護系大学の学生数は63,915名であるのに対し、男子学生数は6,770名で約1割を占めていると報告されている（一般財団法人日本看護系大学協議会, 2014）。一方、吾郷（1996）の研究では男性協力者は3名（2.0%）であり、鈴木ら（2012）の研究では14名（6.4%）であった。それに対し、本調査の男性研究協力者は69名（23.9%）であり、いずれと比較しても高い割合であった。したがって、多数の男性研究協力者の回答の影響が推測される。病院だけでなく看護大学といった看護界における男子学生や男性教員の存在の浸透により、女性性を表す看護師の理想像はありながらも、看護という職がもはや女性だけのものではないという現実的なイメージが少なからず影響したのではないかと推察される。これは、今後の看護師の理想イメージ

と看護学生の自己イメージの変化の一端を示唆する興味深い結果であるといえよう。

今回の調査では、研究協力者が1つの看護大学に限られたため、男女別の分析は行っていない。今後は、研究協力者をさらに募り、看護大学生を代表するようなサンプルによる分析が必要であろう。

V. おわりに

A 大学看護学部生を対象に、看護師に対する理想イメージ、学生自身の自己のイメージを調査した。その結果、看護師に対する理想イメージとして、『看護師の資質を表す理想イメージ』『看護師の冷静さと権威を表す理想イメージ』『看護師の清らかさを表す理想イメージ』『看護師の女性らしさを表すイメージ』の4因子が抽出された。一方、自己イメージでは、『理想の看護師の資質と合致する自己イメージ』『自身のポジティブさを表すイメージ』『自身のネガティブさを表すイメージ』の3因子が抽出された。しかしながら、今回の調査では、A 大学1校からのデータのみであり、看護学生を代表するサンプルではない。今後はサンプルを増やす必要がある。同時に、今回の研究は横断的研究であり、看護学生の看護師に対する理想イメージ、自己イメージが経時的に変化するかどうかについては検討していない。この点についてもさらなる調査が必要と思われる。

謝辞

本研究に参加いただきました看護学部の学生の皆様に感謝いたします。

文献

吾郷ゆかり (1996) : 看護学生の看護婦イメージ—動機と性格特性との関連における分析, 鳥根県立看護短期大学紀要, 1, pp.17-23.
江口瞳, 寺澤孝文 (2006) : 看護師イメージの因子構造と学年進行による看護師イメージ得点の変化, 日本看護研究学会雑誌, 29 (4), pp.71-80.
一般財団法人日本看護系大学協議会 (2014) : 看護系大学の教育等に関するデータベース, 看護系大学の教育等に関する実態調査 2013 年度

状況調査, pp.125-126. <http://www.janpu.or.jp/activities/committee/permanent/a-board4/> (2015 年 8 月 12 日取得).

門脇千恵, 佐々木和義, 中田康夫, 真嶋由貴恵, 渡辺真理, 河口真奈美, 白井千津 (2001) : 看護系大学生が抱く看護婦・士に対する現実像と理想像とマスメディア像, 日本看護学会誌, 10 (1), pp.18-24.

河合塾 (2015) : 2015 年度入試を振り返る, 河合塾ガイドライン, 6, pp. 2-8. http://www.keinet.ne.jp/gl/15/06/toku_1506.pdf (2015 年 7 月 11 日取得).

工藤由紀子, 石井範子, 平元泉, 佐々木真紀子, 長谷部真木子 (2003) : 看護大学生の看護に対するイメージ—入学時における家族背景・入学動機と卒業後進路志望との関連から, 秋田大学医学部保健学科紀要, 2, pp.119-126.

日本看護協会出版会 (2015) : 平成 26 年看護関係統計資料集, pp.2-3, 12-13, 日本看護協会出版会, 東京.

岡本寿子, 植村小夜子, 村上静子 (2006) : 看護職イメージの形成—因子分析を用いて, 京都市立看護短期大学紀要, 31, pp. 89-93.

小山田信子, 塩飽仁, 庄子由美, 渡邊裕美, 佐藤永子, 板垣恵子, 小林淳子, 伊藤尚子, 佐藤八重子 (1994) : 高校生を対象とした看護のイメージ調査, 東北大学医療技術短期大学部紀要, 3 (2), pp.131-138.

白鳥さつき (2009) : 看護大学生が看護職を自己の職業と決定するまでのプロセスの構造, 日本看護研究学会誌, 32 (1), pp.113-123.

佐々木和義, 白井千津, 中田康夫, 河口真奈美, 渡部真理, 真嶋由貴恵, 佐藤健二 (1999) : 看護婦自身が抱く現実像と理想像とマスメディア像の構造, 神戸市看護大学紀要, 3, pp.124-129.

鈴木美代子, 井上都之, 高橋有里, 三浦奈都子, 及川正広, 平野昭彦, 菊池和子 (2012) : 看護学生の看護のイメージと個人要因との関連について, 岩手県立大学看護学部紀要, 14, pp.33-48.

内山久美, 大澤早苗, 横山孝子 (2005) : 職業的社会的化と看護学生の意識—オープンキャンパス参加者の声と入学後の「看護イメージ」から, 保健科学研究誌, 2, pp.79-85.

白井千津, 中田康夫, 佐々木和義, 真嶋由貴恵,

渡部真理, 河口真奈美 (1999) : 看護婦自身が抱く現実と理想—マスメディアのイメージの差, 神戸市看護大学紀要, 3, pp.113-122.